
仮面ライダーwReturns 仮面ライダージョーカー

Jupiter-falcon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーwReturns 仮面ライダージョーカー

【Nコード】

N1311Y

【作者名】

Jupiter-falcon

【あらすじ】

テレビシリーズで描かれなかった48話と49話の間の空白の1年間、相棒を失くした私立探偵の左翔太郎は風都の仮面ライダーとして一人で街の危機を救うのだった。相棒との約束を守るために・・・。この作品はかつて流れたガセネタを使ったりしてます。そのガセネタいっただきー！

この街のR／彼亡き後（前書き）

どうも初めまして

頑張つて続けたいと思つのでよろしくお願いします

この街のR／彼亡き後

風都内――

「こらぁ――！待ちやがれ――！」

赤い複眼、黒い体の戦士、この街では「仮面ライダー」と呼ばれている。

「しつこいなぁもう――！」

赤い体をした怪物を仮面ライダーは追いかけていた

「これでお終いだ！」

『ジョーカー！マキシマムドライブ！』

仮面ライダーはベルトの右腰にあるスロットにメモリと呼ばれるものを挿入した。

「ライダーキック！！うおりゃーーーー！！」
赤い怪物にキックを浴びせた

「ギアアアアアアア！！！！」

怪物は爆発し、人間の姿になっていた

「くつくそ・・・」

怪物だった人間の前に砕け散ったメモリが落ちていた

「左！」

「照井か、あとは頼んだぞ」

そこにやってきたのは風都署の刑事『照井竜』

「ミュージアムを倒したのにまだメモリが流失しているのか・・・」

数か月前――

左翔太郎とその相棒フィリップはガイアメモリを製造するミュージアムを倒した、
だがミュージアムに多額の資金を与えていた財団Xの加頭順がフィリップの実の姉である園咲若菜を使ってガイアインパクト引き起こすのを阻止するためにフィリップは命がけで変身し地球の中へと消えて行った……。

現在・鳴海探偵事務所――

パソコン！

翔太郎は緑色のスリッパで頭を叩かれた

「いつてーなあ！何すんだ！亜樹子！！」

「何って翔太郎君こそあたしの買い物途中で勝手にいなくなつて・
・・」

鳴海探偵事務所の所長『鳴海亜樹子』はスリッパで翔太郎のことを叩きまくっていた。

「痛いからやめろって・・・」

続ける亜樹子

「いい加減にしろ・・・」

それでも続ける亜樹子

「いい加減にしねえか！！！！！！！！！！」

カランカラン

玄関が空いた

「依頼人！」

亜樹子は目を輝かせながら来訪者のもとへ向かった

「あの依頼をお願いしたいんです」

「任せて下さい！この名探偵鳴海亜樹子が・・・」

亜樹子が依頼人と話しているなか翔太郎はガレージへ向かった

そしてガレージの中にあるホワイトボードに向かってつぶやいた

「フィリップ・・・」

この街のR／彼亡き後（後書き）

大丈夫かな・・・

頑張っ
て続けよう！！

この街のR／仮面ライダージョーカー（前書き）

小説って難しいですね（汗）

この街のR／仮面ライダージョーカー

鳴海探偵事務所――

「要するに、家出した息子さんを探してほしいんですね？」

「はい……」

依頼人は『山田俊子』さん

依頼内容は喧嘩して家出した息子の山田哲也君を探して欲しいとのこと

翔太郎はコーヒーをすすりながら話を聞いていた

「あの子今回の定期試験で赤点を取ってきたから叱ったの、そしたら・・・」

亜樹子はよくある話だなと思いながら聞いていた

「あの子を探してください！お願いします！！」

「任せといてくれ、この街はオレの庭だ・・・」

翔太郎はソフト帽を被った

「安心して待つてな」

カフェ店内――

「翔ちゃんカラオケ行こうよ」

「エリザベス・・・いつも言ってるだろ、オレは暇じゃないって・
・」

翔太郎は学生のことならと思って学生事情に詳しいクイーンとエリザベスに情報を求めてきたのだ

「ケチ！翔ちゃんのケチケチ！！」

呆れた亜樹子はクイーンに聞いた

「山田哲也って子知ってる？」

「知ってるよ」

翔太郎はクイーンのに近づいて

「ほんとか？」と言った

「うん、メチャクチャ優等生だよな」

「そうそう、風都の高校生で1番じゃないかって」

翔太郎は自分とは大違いだなと感じながら

「そうか・・・」としよげながら言った

「でも最近なんか変なやつらとつるんでるみたいだよ」

「変な奴ら？」

クイーンは携帯の画面を見せて言った

「こいつらだよ」

廃墟ビル――

「ここか……」

翔太郎と亜樹子はクイーンとエリザベスに教えてもらった『奴らのアジト』に来た

「なんか、いかにもって感じだね……」

そこに一人の男がやってきた

「てめえらかオレたちのこと嗅ぎまわってるのは」

翔太郎は男の顔見て言った

「山田哲也ってやつしらねえかな？」

男はポケットからガイアメモリを取り出した

「メモリ！？」

「知ってたとしても教えねーよ！」

『キー！』

男はメモリを左手の甲に挿した

「ふはははははー！！」

キードーパントへと変わった

「キーってなんか、迫力ないね（笑）」

笑う亜樹子に翔太郎は

「亜樹子、照井を呼んでくれるか？」

「竜君を？分かった、呼んでくるね」

亜樹子はビルの外に出て照井竜を呼びに行った

「逃がすかつ！」

ドーパントが亜樹子を追いかけようとした

「うらっ！」

翔太郎が飛び蹴りをした

「何の真似だ？」

「お前の敵はオレだ・・・」

翔太郎はロストドライバーを腰に装着し、ベストの中からジョーカーメモリを取り出した

「行くぜ、フィリップ」

『ジョーカー!』

「ふいりつぶだあ？何言ってるだてめえ」

「いけねえ、ついクセが……」

翔太郎はメモリを左手に持ち替えてドライバーに挿入した

「変身……」

『ジョーカー!!』

翔太郎は黒い装甲に身が包まれた

「お前は・・・!？」

黒い戦士は左手をスナップさせて言った

「仮面ライダー・・・ジョーカー」

「仮面ライダーかよ・・・」

「うおらっ!」

ドーパントの顔面に右の拳を叩きこんだ

「ぐわっ!」

「さあ、そこを通してもらおうか・・・」

この街のR／仮面ライダージョーカー（後書き）

ああ・・・ほんとに難しい・・・

この街のR／復讐を断ち切れ（前書き）

難しい！

この街のR／復讐を断ち切れ

「さあ、そこを通してもらおうか・・・」

仮面ライダージョーカーに変身した翔太郎は左手をスナップさせた

「てってめえ、一体何者なんだよ!？」

ジョーカーは腕を回しながら言った

「この街の涙を拭う黒いハンカチ・・・」

そして回していた腕でドーパントを殴った

「ぐはっ！」

「仮面ライダージョーカー」

ドーパントは壁にのめり込んだ

「さあ、山田哲也の居場所を教えてもらおうか・・・」

ジョーカーは指をポキポキ鳴らしながらドーパントに近づいた

すると

「ごめんなさい！」

「へ？」

ジョーカーは出てきた言葉にびっくりして硬直してしまった

「なんですと？」

「お願いします、許してください

僕のメモリ本当に何の能力もないんです・・・まさか仮面ライダー
がくるとは・・・」

そう言って変身を解いたドーパント

「さっきまでの威勢はどこにいったのやら・・・」

ジョーカーも変身を解き青年に聞いた

「で、山田哲也はどこにいった？」

青年は震えながら奥の扉を指差した

「あそこか・・・あんがとな」

扉に向かおうとした翔太郎は青年の方を見て

「メモリよこせ」

青年は素直にメモリを渡した

翔太郎はそのメモリを砕いた

「メモリなんかに出すんじゃないぞ」

そう言い残して扉へ向かった

風都警察署超常現象捜査課

「課長！お昼なんで飯でも行きませんか？」

「いいつすねえゝたまには3人で食べましょーよ！」

この捜査課はドーパント事件を捜査する課で人はたったの3人しかない

「刃野刑事、オレはもう少しこの集団について調べます」

この青年は照井竜

彼もこの街を守る仮面ライダーなのだ

「仕方ないっすね、刃さん二人でいきましょう！」

このお調子者は真倉俊、翔太郎とは犬猿の仲。ちなみにあだ名は『マッキー』

「そうだな、ふははははは」

彼は刃野幹夫刑事、照井の部下だ（一応彼より年上）

すると竜の携帯が鳴った

♪

「照井だ、どうしたんだ所長……!?」

『奴らのアジト——』

「きつたねえとこだな……」

翔太郎は教えてもらった扉を開けて通路を通っていた

「もしかして騙されたのか……」

まさかな、刃さんじゃあるまいしw
「」

進んでいくと光が見えた

「出口だ！」

光の先には・・・

「なんじゃこりゃ・・・」

大きい部屋の中心にリングがありその周りには若者がたくさんいた
リングの上には2体のドーパントが戦っていた

「やれー!!」

「そこだっ!!」

「マジかよ・・・!」

翔太郎の目線の先には山田哲也がいた、手の中にはメモリがあった

「まさか・・・!」

ゴングが鳴り戦いが終わった

「またしても勝利したのは彼！増田伸介！やはりキメラのメモリには誰も勝てないんでしょうか」

マイクを持った男が興奮気味で実況していた

「さあ次の挑戦者は……山田哲也だーっ！」

声援が鳴り響いた

リングに上がろうとする哲也を翔太郎が止めた

「やめるんだ！メモリなんか使ったらだめだ！」

「あなたは……」哲也は小声で言った

「オレは左翔太郎、探偵だ」

哲也は驚いた顔をして聞き返した

「探偵？」

「ああ、お母さんに依頼されてきた、なんでこんなところに？」

「僕が赤点を取ったのはあいつのせいなんだ・・・絶対にぶちのめしてやる・・・」

リングに上がろうとする哲也を翔太郎は止めて言った

「オレにまかせろ、お前は今すぐに母さんのところに帰るんだ、メモリを捨てて」

翔太郎はリングに上がった

「おっとー一体どうしたんだ、乱入者だーーーー!!」

「オレが代わりに戦ってやるよ・・・」

マイクを持った男はOKサインを出した

伸介はメモリを掌に挿した

『カメラ!』

伸介は顔がライオン、体が鳥、下半身が象という異形なドーパントになった

「誰が相手でもかまわねえ、ぶつ殺す!!」

そのセリフに観客の声援がわいた

「挑戦者は一体何のメモリを使うんですかねー!!」

翔太郎はドライバーを装着した

「ん？」

『ジョーカー！』

「おっとおゝ！これはまさかの……！！」

「変身！」

『ジョーカー……！！』

翔太郎は光に包まれて変身した

「まさか…お前は!？」

「仮面ライダージョーカー…」

そう言ってキックをした

「うおらっ!」

「ぐはっあ!」

ドーパントを腹を抱えて膝をついた

「てめえが一体何したかしんねえがな…」

ジョーカーはメモリをマキシマムスロットに差し込んだ

『ジョーカー！！マキシマムドライブ！！』

「依頼人を泣かすようなことすんじゃね！！」

ジョーカーの右手に紫色のエネルギーが包まれる

「ライダーパンチ！！」

「ひっ！」

ライダーパンチがドーパントにさく裂した

「ぎゃあああつあああ！！！」

伸介から排出されたメモリは砕け散った

「そ、そんな……」

MCがその場に倒れこんでしまった

そこに亜樹子と竜がやってきた

「おお！照井遅かったなあ」

「左……」

竜は周りを見回して翔太郎に言った

「お手柄だぞ！左！！」

「あ？」

「こいつらはメモリを使って賭け試合をしてたやつらなんだ！」

だからリングで戦ってたのね！と翔太郎は納得したようだった
このことを竜は調べていたのだ

「警察呼ばなくっちゃね！」

亜樹子は警察に連絡をした

そして竜は

「全員そこを動くな！警察だ……」

「一件落着、でもねえな……」

鳴海探偵事務所

「ありがとうございます！」

翔太郎に必死にお礼をする山田俊子

「うちの探偵は優秀ですから！」

特に何もしてない亜樹子は偉そうに言った

「あの、ひとつ哲也君に聞きたいことが…」

哲也はいやそうに翔太郎の前へ行った

「どうしてあそこに？」

「実は…」

「そうだったんだ…」

ドーパントになっていた伸介は哲也のクラスメイトで定期試験のとき哲也に自分の名前を書かせて答案を提出させていたのだった、名前を書かないと殺すとメモリで脅されたこと。

「だからあそこに…」

「知らない人にメモリを渡されてあの廃墟ビルに行けって言われて…」

母の俊子は涙をこぼしながら謝った

「ごめんなさい、ごめんなさい…」

「いくら憎くても復讐はするもんじゃない、なあ照井」

横で聞いていた竜が小さくうなずき、哲也に聞いた

「メモリを渡してきたのはだれなんだ？」

哲也は首ふって「わからない」

と答えた

「そうか…」

翔太郎は立ち上がり

「いいじゃねえか、こうやって無事だったんだし、次はそういつ」とすんなよ

「はい！」

二人は事務所をあとにした

風麵屋台――

「やっぱりうまいねえ風麵」

翔太郎は風都の名物『風麵』を一人で食べていた

「でしょー翔ちゃん、腕磨いたあるよー」

「翔ちゃん…？」

翔太郎の隣に座っていた男が反応した

「どうかしたか？」

翔太郎が聞くと男は

「なんでもないです、すみません…」

と言って代金を置いて立ち去った

「やっぱうめえな風麺…もう2人で食えないんだな…フィリップ」

翔太郎は風麺をつれしただけどなんだか悲しそうに頬張った

ホテルマンハッタン502号室――

「翔ちゃん…翔太郎か…ふっ…」

男はニヤリと笑いポケットから青いメモリを出して机の上に置いた、

メモリには『M』と書かれていた

この街のR／復讐を断ち切れ（後書き）

よく書けた！

っ
て
思
っ
て
見
直
し
て
み
る
と
わ
け
わ
か
ん
な
い
と
こ
ば
っ
か
w
w

丁に質問するな／照井始動！（前書き）

ご指摘をありがとうございます！

参考にさせていただきます

そしてついに…

あの男が動き出す…！！

Ｔに質問するな／照井始動！

風都警察署超常現象捜査課――

「メモリは一体どこから流出しているんだ…。」

竜はミュージアム壊滅後のドーパント事件の資料について調べていた

「やはり捕まってない売人が流出させているのか…。」

何人かの売人は捕まってないのだった

竜の携帯が鳴った

♪

「左か、どうした…」

なんだと！？所長が…！？」

鳴海探偵事務所――

事務所のドアが大きな音を立てて開かれた

「左！！どういうことだっ！所長が行方不明だと！」

「そのことなんだが…」

翔太郎は一枚の紙切れを見せた

「あたし、大阪に帰るね

なんでって？それはね〜

竜君をね

ウフッ！

『

「ウフッってなんだし」

「所長が…所長が…」

「どうした？照井…？」

翔太郎が手をかけようとした途端

「まさか…あの言葉は本当だったのか…」

5日前――

「竜く〜ん!!」

見てみて〜新しい服かったんだあ〜」

「すまない所長、今から会議なんだ」

亜樹子はスリッパを取り出して竜の頭を叩いた

「なんでいつも仕事優先なのよ!」

「本当にすまない所長、刃野刑事たちが待ってる……」

パソコンッ!!

「もう竜君なんて知らないっ！ドーパントになって襲ってやるわ！！」

「ということがあったんだ」

「そうか…でそれがこの手紙とどついう関係が…」

竜の目つきが変わった

「左！オレは所長を探す…メモリを使わせるわけにはいかないっ！」

「おっおい！」

そう言い残して竜は事務所を後にした

「この手紙をどう読んだらそういう考えになるんだよ…」

ウィンドコーポレーション玄関前――

「ここが一番メモリの受け取り場所になっている所か…」

竜は資料を見て一番メモリの売買されている場所にやってきたのだ
った

資料によるとメモリを渡される日は決まっていて第2水曜日に売買
される

「所長…君はオレが必ず守る…」

ちなみにこのウィンドコーポレーションが建っている場所は元々デ
イガルコーポレーションが建っていた場所だ

「やはり頻繁に売買はしないか…」

その時だった

黒いスーツを着てケースを持った男が近づいてきた

「見つけたぞ…！」

竜は男のもとへ行った

「そこのお前、ケースの中身を見せる…」

警察手帳を見せた

「チッ！サツか！！」

男は逃げ出した

「待てっ！！」

竜は男を追いかけた

風都駅前――

「くそっ！しつけないあ！！」

男は立ち止まった

「そこまでだ…観念してメモリを渡せ…」

「素直に渡してたら逃げてねえよ！！」

男は懷からメモリを取り出した

『タイガー！』

男は顎にメモリを挿した

「はっはっはー観念するのは貴様の方だ！死にたくなかったらさっさと消えろ！」

男はタイガードーパントに変身した

「悪いがオレに脅しは効かない…」

『アクセル!』

「変．．身!」

竜は腰に巻かれたアクセルドライバーにアクセルメモリを挿入した

『アクセル!』

エンジン音が鳴り響き竜は赤い装甲に包まれた、

彼はこの街を守るヒーロー『仮面ライダーアクセル』に変身した

「お前・・・何者なんだ？」

「オレに質問するな・・・」

竜はエンジンブレードを振りかざした

「さあ、振り切るぜ！」

丁に質問するな／照井始動！（後書き）

照井の単独のお話

彼は亜樹子を守ることができるのか！！w

丁に質問するな／所長は何処（前書き）

どうも、最近ドラクエにハマってて

ついやりこんで投稿が遅れました

照井のセリフって難しい

「に質問するな／所長は何処

「さあ、振り切るぜ！」

アクセルはエンジンブレードでドーパントを攻撃した

「ぐわっあー!!」

「メモリを捨てるんだ・・・」

アクセルがそう問いかけるとドーパントは

「やだね、これがないや金になんねーんだよー!!」

そう言ったドーパントは高速で移動した

「なにっ！！」

高速で移動したドーパントはアクセルに蹴りをいれた

「どおらっ！！」

「ぬわぁっ！！」

ドーパントはアクセルの周りを高速移動している

「どこから来るんだ……」

アクセルはどこから攻撃が来るか予想がつかなかった

「っら！！」

後ろからおもいきり殴られた

「クッ……!!」

その後も右や左、後ろから攻撃を受けた

「どうだ！ついてこれねえだろ！！！！参ったか！！はははははは！！！」

アクセルは変わった形をしたメモリを取り出した

「抜かしてやろう……トライアルの力で！！」

『トライアル！！』

アクセルはアクセルメモリを抜いてトライアルメモリを挿した

そして赤い装甲は黄色くなった

「きつ黄色！？」

エンジン音が鳴り黄色い装甲は青くなった

「青っ!?!」

アクセルはアクセルトリアルとチェンジした

「すべて…振り切るぜ!!」

アクセルトリアルは超高速移動でドーパントを攻撃した

「はっ速い!!」

ドーパントも負けじと高速移動した

「無駄だ…」

アクセルトリアルはタイガードーパントを超える速さだった

「なんだとおっ!!」

アクセルトリアルはメモリを抜いてボタンを押した

ピッ!

そしてメモリを空中に投げた

「なっ!」

その瞬間アクセルトリアルはドーパントに何十発ものキックを浴びせた

「はああああああああ!!」

投げたメモリがアクセルトリアルのもとに落ちてきた
それを掴んだアクセルトリアルはボタンを再び押した

『トリアル！！マキシマムドライブ！！』

メモリの画面には『9・6』と表示されていた

「9・6秒それがお前の絶望までのタイムだ」

「ぐわあああつあ！！！！」

ドーパントは爆発した

そして体内から排出したメモリが砕けた

「うお……」

竜は変身を解いて売人の男の胸ぐらをつかんだ

「おいっ貴様っ！所長はどこだ！！」

「しょ、所長…？」

「誰にメモリを売るつもりだった！！！教えてっ！」

「若い…女に…」

男は気絶した

「若い…女…」

竜はウインドコーポレーションの方を見た

「所長…」

鳴海探偵事務所

「まったく照井のやつ…」

翔太郎は亜樹子が置いて言った手紙を見ていた

そのときドアが開いた

「メリ〜クリスマス!!」

「サンタちゃん…今夏だぜ…」

事務所に風都の情報屋のサンタちゃんがやってきた

「で、どうしたんだ？」

「それがね、これ見てちょーだい、ピーゴン！」

サントちゃんは一枚の写真を翔太郎に見せた

「こいつがどうしたんだ？」

「こいつはねミュージアムの売人の生き残りのボスなんだよ」

「ふーん…ってマジか！！！」

サントちゃんはもう一枚の写真を見せた

「で、これがボスの彼女」

その写真を見た翔太郎は腰をぬかした

「これ…そっくりじゃねえか」

「そうなのよ」

ウィンドコーポレーション裏口――

「あいつおせーな」

スーツにケースを持った男が人を待っていた

「まったく…ボスに怒られてしまっぜ…」

その時

「やっと来たか…？」

現れたのは竜だった

「貴様が待っている男は来ない……」

「なに？」

竜は拳を握りしめて言った

「所長はどこだ……」

「所長？」

竜は亜樹子の写真を見せた

「この人は……！？」

男は竜に問いかけた

「なぜこの人を知っている!？」

「オレに質問するな……」

男は懷に手を入れてメモリを取り出した

「ボスが帰ってくる前にあの人にこいつのことを聞かねば……」

『アクア!』

男はアクアドーパントに変身した

竜はアクセルメモリを取り出した

『アクセル!』

「さあ思い切り、振り切るぜ…」

丁に質問するな／所長は何処（後書き）

展開がどうなるのやら…

メモリの能力を考えるのが難しい

番外編 家族からCへ／風都を守る風（前書き）

感想を読んでいると次の話を早く書きたくなってしまふ！！

でも今回は番外編

この話をしておかないと後々めんどうなので（汗）

本編の話より少しあとの話です

どうぞご覧あれ！w

番外編 家族からCへ／風都を守る風

「食欲の秋、読書の秋…そしてコーヒーの秋…」

翔太郎は窓の外を眺めながらコーヒーを飲んでいた

「この素晴らしい夕暮れに一杯のコーヒー…ハードボイルドだぜ…」

「ん？」

翔太郎は異変に気付いた

「亜樹子？」

いつもなら呆れた亜樹子が愛用のスリッパで叩いてくるところなのだが亜樹子がない

「どこ行っただ？」

翔太郎はコーヒーを飲みほして依頼書を片付けた

翌日――

「亜樹子帰ってこねえな…」

朝になっても亜樹子は帰って来なかった

「なあ、フィリップ！どうしたんだろうな…」

翔太郎は手に持っていた帽子を顔が隠れるくらい深くかぶった

「フィリップ…、もう1か月か…」

翔太郎の電話がなった

」
」

「照井か…どうした？」

「左！今すぐ風都警察病院に来てくれっ！」

「何があつたんだ？」

「オレに質問するな！！！」

ブチッ…

電話が切れた

「一体どうしたんだ…！」

翔太郎は深くかぶっていた帽子を上げ、事務所を後にした

風都警察病院――

翔太郎が玄関に駆け付けた時、玄関には抱き合っておびえている刃さんとマツキーがいた
そのあとすぐに竜も駆け付けた

「実物見てもまだ信じらんねえよ」

刃さんの目線の先には倒れている警察関係者と園咲若菜がいた
若菜は人間の姿の状態でエネルギー弾を手から放出していた

「ドーパントに変身しなくても、ドーパントの力が発動している……！？」

若菜は不気味な笑みを翔太郎たちに見せて屋上の方へ逃げに行った
翔太郎と竜は若菜を追いかけた

屋上――

「パワーが足りない…」

若菜は胸を押さえながらゆらゆらと歩いていた
そこに竜と翔太郎が駆け付けた

「待てっ！園咲若菜！！」

「お断りよ…私は再起動しこの汚れた街を浄化する！」

「この街は汚れてなどいない！！そう思っるのはお前の心が歪んでい
るからだ！！」

後ろで翔太郎は表情を濁らせた

「風都を危機にさらすものはこのオレが許さんっ!!」

竜はアクセルメモリを出した

『アクセル!!』

「変・・・身!!」

『アクセル!!』

アクセルはエンジンブレードを持って若菜に攻撃しようとした

「待ってくれ!照井!!」

翔太郎がその間に入って攻撃を止めた

「どけっ！左！力づくでも彼女を止めなければ！！」

「頼む待ってくれ…今彼女を傷つけたらフィリップは何のために命を投げ出したんだ！」

翔太郎はハッ！という表情をした、聞かれてはまずい人の前ですってしまった

「来人が命を…どうということっ！？」

若菜は翔太郎の胸ぐらをつかんだ、翔太郎は下を向いていた

「ねえ！どうということっ！！」

「フィリップは消えた…君を守るために、最後の力を振り絞り…地球の中へ…」

若菜は泣いて翔太郎を突き飛ばした

「うわあああ！」

後ずさりしながら若菜は消えた

「あっ！」

翔太郎と竜は屋上に立ち尽くしていた

数日後――

木の日陰の下にシュラウドが座っていた
そこに若菜が現れた

「それで、何が知りたいの？」 シュラウドはそう問いかけた

「再起動…そして私なりのガイアインパクト…」

「そう…」

若菜はシュラウドのすぐ横に来た

「答えは地球の本棚にあるわ」

若菜は驚いた

「意外…あなたがこんなにも素直に協力してくれるなんて…」

シユラウドは若菜の手を握った

「家族だもの…」

「えっ？」

若菜はシユラウドの口から『家族』という言葉が出てくるとは思ってもみなかった

「若菜…あなたは思うようにするといいわ…」

シユラウドは空を見上げた

「あなた…今逝くわ…」

シユラウドは若菜の膝元に倒れこんだ

「お母様…」

風都タワー前——

風都タワーの前にある橋に若菜はいた

若菜は地球の本棚に入った、そして閲覧を終えた

「来人…」

その瞬間若菜の体は分解されてエクストリームメモリへと再構築された

「来人！これが私の決めたガイアインパクトよ…」

メモリの内部空間でフィリップは横たわっていた

「来人！」

その横にいた若菜がフィリップを起こした

「…！、姉さん？」

フィリップは驚いて起き上がった

「来人、私の体をあなたにあげる」

「えっ…？」

若菜は腕を組み得意げに言った

「あなたの相棒の泣き顔見てられなかったんですもの」

フィリップは状況を呑み込めてなかった

「人類の未来のために地球を変えるのが園咲の使命、でもそれにふさわしいのは私じゃない…」

若菜はフィリップの方を見て言った

「誰よりも優しいあなたよ、来人」

「姉さん…」

フィリップは笑った

「でも僕どうやって…」

若菜が歩いて行った先には父・琉兵衛ともう一人の姉・冴子がいた

「答えはそのうち見つかるわ」

冴子と若菜を中心に母のシュラウド、琉兵衛と4人が並んだ

「とりあえずこれから風都を守る風いなさい」

「みんな…」

「わたしたちは地球に選ばれた家族だからね、この地球の中からお前を見守ってるよ」

「父さん…母さん！姉さん！！」

フィリップは4人のもとへ走った、だが琉兵衛が手を出して止めた

「来人、来てはだめ…」

「さよなら、来人…」

冴子と若菜は手を握り合っていた

「さよなら…ありがとう…」

「若菜姉さん…初めてもらったポストカードと同じ笑顔だ…」

若菜は泣いて言った

「バカ…」

そのまま4人は地球の中へと消えて行つた

「ありがとう…」

フィリップは泣きながら言った

鳴海探偵事務所――

「最近なんか見られてる気がすんだよなあ」

ガチャッ！ドアが開いた

「アロハ〜！！」

亜樹子が南国を漂わせる格好で帰ってきた

「お前…どこ行ってんだ？」

「ハワイに〜おほほほほほほ！！」

亜樹子はスキップしながら事務所の中を動き回った

「てんめえ……まさか!!」

翔太郎は机の引き出しの裏にある封筒を手に取り中を見た

「ないっ
・
・
・
! !」

この封筒の中身は翔太郎のへそくり、ざっと50万はあったはずなのだが…

「500円玉と10円玉3枚…」

亜樹子はゆーつくりドアノブに手をかけた

「亜樹子おおおとおお……！！！！！！！！！！！」

「」

番外編 家族からCへ／風都を守る風（後書き）

初登場！園咲一家！

この話しないと後々ねえ… W W

なぜ今書くかって？

そりゃ、忘れちまうから覚えてるうちに書いておこうと思って W W

丁に質問するな／全てを振り切れ（前書き）

照井の暴走が今回で終わります

丁に質問するな／全てを振り切れ

鳴海探偵事務所――

「この女…亜樹子そっくりじゃねえか!？」

「そうなのよ」

翔太郎はサントちゃんの持っていた写真をじっと見ていた

「こいつの名前わかるか？」

サントちゃんはサングラスを上に入れて言った

「『ヨシキリ横山亜喜代』っていう名前だよ」

「亜喜代ってもうそのまんまじゃねえか!?!」

翔太郎は帽子を取ってドアノブに手をかけた

「サンキューなサントちゃん」

翔太郎はそう言って事務所を出て行った

ウインドコーポレーション裏口前――

アクセルはエンジンブレードを構えた

「はっ！！」

「オレにはそんな攻撃は効かねーな!!」

アクアドーパントの体が液化化した

アクセルは液化化したアクアドーパントを斬りつけたが効いていなかった

「なんだとっ!!」

「オレにはどんな攻撃も効かない、オレに勝つことは不可能だ!」

アクアドーパントはアクセルの体に巻きついてしめつけた

「くっ…くっ…!」

「ふはははは！！」

アクセルは身動きが取れない状態だった

「このままあの人の所へ……」

アクアドーパントはアクセルを巻きつけたままビルの屋上へ行った

ウインドコーポレーション社長室――

アクセルは屋上に連れて行かれそのまま会社の社長室に連れて行かれた

「オレをここに連れてきてどうするつもりだ」

「あの人がもうすぐ来るから待っている」

数分後

ガチャッ！

社長室のドアが開いた

「あら、珍しい客人だね」

「やっと来てくれましたか…」

「君は…!？」

そこに現れたのは亜樹子そっくりな女が現れた

「しょ、所長…!？」

「所長? なんの話？」

「こいつ、さっきから亜喜代さんのことを所長って…」

アクセルは力を振り絞りアクアードーパントを振りほどいた

「人違いのようね…」

アクセルは拳を握りしめた

「オレがそんなに不満だったのか…」

「あ？」

アクアドーパントが油断した瞬間だった

『エレクトリック！』

「はあっ！！」

エンジンブレードが電気を纏った、そしてアクセルはドーパントを

斬りつけた

「無駄だ！きかねーよ！！」

だが

「ぐわあっ！！なぜだ！？なぜ……」

ドーパントはダメージをくらい元の姿に戻った

「水は電気を通す…唯一の弱点だな…」

『アクセル！マキシマムドライブ！！』

もとの姿に戻ったアクアドーパントにアクセルは全身に高熱を纏い

飛び蹴りを放った

「はぁっ!!」

「ぐわっ ああああ!!」

メモリが砕けた

「うつ…うつ…」

アクセルは亜喜代に向かって言った

「すまなかった所長!! オレが悪かった…だから…」

アクセルが話してる最中に亜喜代はメモリを出した

「なんのことが知らないけど…あなたは知りすぎたから終わりね…」

その時窓が割れて飛び散った

「なにっ!!」

そこに現れたのはドーパントだった

「亜喜代、こいつは誰だ…」

ドーパントは変身が解けて男の姿になった

「お前は…」

「ほおう、仮面ライダー様じゃないか」

その男はミュージアムの売人の生き残りのボス『澤田雄二』さわだゆうじだった

「雄二…遅かったわね」

「悪かったな亜喜代…で、どうするこいつ？」

亜喜代はメモリのボタンを押した

『フォッグ！』

「わかったよ奥様…」

『ウイング！』

亜喜代と雄二はドーパントに変身した

「終わりよ、赤い仮面ライダーさん…」

その時

ドンッ！！

「ああ？」

ドアが開きメモリを碎かれた警備員が倒れていた

「待たせたな、照井…」

現れたのは翔太郎だった

「左…！」

「ナイスな所で登場したみたいだな…」

ウイングドーパントは背中についている翼を大きく開いて言った

「てめえ何者だ…！」

翔太郎はジョーカーメモリを取り出して言った

「探偵さ…」

『ジョーカー！』

「変身…！」

翔太郎はジョーカーに変身した

「また仮面ライダーかよ……」

「行くぜ…照井…」

「ああ、振り切るぜ…」

ウイングドーパントはジョーカーに攻撃を仕掛けた

「ハッ!」

「うらああ!」

ジョーカーとウイングドーパントはビルの外へ

「さあ、赤い仮面ライダーさん、戦いましょう…」

「所長…オレのせいで…」

アクセルはエンジンブレードを構えた

「オレが止める…!!」

アクセルはフォッグドーパントを攻撃しようとした、が

「やっぱり…できない…」

「ふふ、はあっ…!」

ドーパントはアクセルの足をすくい上げて転ばせた

「なっ！」

「どうしたの？クールな仮面ライダーさん」

アクセルは立ち上がった

「所長……」

ウィンドコーポレーション駐車場――

「くそっ！飛ぶなんてせけえ真似しやがって」

ウイングドーパントは飛んでジョーカーを攻撃していた

「飛べねえ豚はただの豚だ！！はっはっははははは！！」

「オレは豚じゃねえし…」

ドーパントはジョーカーの周りに風を起こした

「くっそ…風なんか起こしやがって…」

「オレはこの街をこの風で滅ぼしてやらあ…」

「ああ？」

ジョーカーはドーパントが起こした風を振り切ってジャンプした

「この街を風で滅ぼすだあ？」

ジョーカーはドーパントの顔面を思いっきり殴った

「ふざけんなっ！！」

「ぐはっ！」

ドーパントは殴られた衝撃で地面に落ちた

「この街は…風で守られてんだ！なめたこと言ってんじゃねえ！」

『ジョーカー！マキシマムドライブ！！』

「今回は色々あってまた描写が少なくて申し訳ねえけどこれで終わりだっ！」

ジョーカーの右手に紫色のエネルギーが纏った

「ライダーパンチ！！」

ライダーパンチがドーパントの腹部に命中した

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

澤田は地面に横たわって砕かれていたメモリに手を伸ばしていた

「さあて、照井ん所はどうなって…っってお前！！」

「はあい」

亜樹子が立っていた

「亜樹子おおおお!!」

「何よ、どんな顔してるかは想像つくけど」

ジョーカーは変身を解いた

「今すぐ来いっ!!」

翔太郎は亜樹子の手を引っ張ってビルの中に入って行った

ウインドコーポレーション社長室――

アクセルは手を出せずにドーパントの攻撃を受けていた

「はっはっは！…どうしたのかしら？ まったく…」

「くそ…」

「もう終わりね、赤い仮面ライダーさん…」

ドーパントは大量の霧を出した

「すまない…所長…オレは鬼になる…!!」

『エンジン！マキシマムドライブ！』

エンジンブレードからAの文字をしたエネルギー刃を射出した

「ぜ、絶望が…くっ、おま…君の…こ、ゴールだ…!」

「きゃ ああああああああ…!!…!!…!!」

亜喜代の体からメモリが排出された

「あっ ああ…」

アクセルは変身を解いた

「すまない…所長…すまなかった…」

その時翔太郎と亜樹子がやってきた

「おお、てる…」

パソコン！！

「痛って！」

亜樹子がスリッパで翔太郎の頭を叩いた

「竜君！！」

竜は声のする方を見た

「しょ、所長!!」

竜は頭がこんがらがっていた

「所長が二人……!!?」

翔太郎は紙切れを竜に見せた

「これをもう一回見ろ!」

竜は紙切れを取り、もう一度見た

「あたし、大阪に帰るね」

なんでって？それはね〜

竜君をね、お母さんに会わせたいからだよ！

竜君忙しそうだから、連れてくるからね！

ウフツ！

じゃ、3日ぐらいしたら帰るから

じゃね〜
『

「…」

竜は手紙を握りつぶした

「オレの早とちりだったのか…」

「そういうことだ、だがよかったじゃねえか」

「なに？」

翔太郎は竜を立ち上がらせて亜樹子の隣に行かせた

「お前の亜樹子への愛、それがちゃんとわかってな」

「所長への愛…」

亜樹子は照れて顔隠した

「愛ってじゃん、そんな、もうウフフフッ」

「それに、売人一斉検挙だしな」

（その後わかったことだがウインドコーポレーションは売人の巣だったらしく
生き残りの売人は全員逮捕された、一件落着つてとこだな。でも結局お母さんは来れなかったらしい）

鳴海探偵事務所――

「竜く〜ん」

亜樹子は竜にべったりくっついていた

「デレデレすんなよ」

翔太郎はタイプライターを打ちながらそんな二人を見ていた

「まったく…照井もなんか言ったらどうだ？」

「どうしたあ？左？」

「ゲッ！」

竜は今までに見たことないほどの満面の笑みをしていた

「照井…まあいいか、なあフィリッ…」

翔太郎は自分の頭を叩いた

「くそっ、まったく… ああっ!!」

翔太郎は机を蹴ってガレージの中へ入った

「すまない所長、今から仕事なんだ、また後で会おう」

「うん!! 後でねえ、ウフフ!!」

竜が事務所から出て行ったあと亜樹子は翔太郎の机を整理していた

「うん？」

封筒が落ちた

「なんじゃこりゃ……おお!」

亜樹子の目が『¥』になった

「金えゝ」

亜樹子の手にはハワイ旅行のパンフレットがあった

ホテルマンハッタン502号室――

部屋のドアが開いた

「準か…やっと来たか…」

「遅くなってすまない、東京から来るのはかなり時間がかかってな」

ホテルの部屋には男が4人、女が1人いた

「これがお前のメモリとドライバーだ」

ソファに座ってる男が準と呼ばれる男に渡した

「『P』のメモリか…」

がたいのいい男が立ちあがって言った

「全員そろったんだそろそろ目的を教えてください」

イスで腕を組んで寝ていた男が目を覚ました

「
…」

足を組んだ女がワインを飲みほしたときソファに座ってた男が立ちあがった

「オレ達の目的は…」

男はテーブルの上にある『M』のメモリを手にとって言った

「風都を壊滅させることさ」

丁に質問するな／全てを振り切れ（後書き）

うん、 亜樹子と亜喜代…

顔はそっくりでも性格はじえんじえん違うわ！ ↑ 京水さん風www

さあ次から黒幕が動き出す！！

Bの目的／襲いかかる残影（前書き）

新章突入！

空白の1年で起きた最大の事件が幕を開ける… W

Bの目的／襲いかかる残影

鳴海探偵事務所――

「全く亜樹子の野郎…オレのへそくりを勝手に使いやがって…」

翔太郎はコーヒーを飲みながら亜樹子の頭をポンポン叩いていた

「翔太郎君ごめん…」

「反省すりゃいいんだよ」

翔太郎はコーヒーを飲みほし、ラジオをつけた

『早乙女唯さへつめゆいのYUIラジオの時間です！』

「これが若菜姫の後番組か…若菜姫…どこ行っちゃったんだろうな」

ガチャッ！

「ん？依頼人か…？」

「あっ！竜君！！」

やってきたのは照井竜だった

「左！事件だ！」

竜は翔太郎に資料を見せた

「まだドーパントがいるのか…」

「ああ、問題はこれだ」

竜は1本のメモリを翔太郎に見せた

「あっ！これ…」

「こいつは…！？」

「そう…T2ガイアメモリ…」

竜が持っていたのはT2ガイアメモリだった

「なんでこれが…」

「オレにもわからん…この前逮捕した売人のボスが持っていた」

竜が逮捕した売人のボス・澤田雄二が隠し持っていたメモリだった

「まさか財団が…」

「いや、それはない…財団はメモリから手を引いたはずだ…」

『番組の途中ですがニュースです。風都立翼高校に怪人が侵入した模様…』

「なに？」

竜の携帯が鳴った

♪

「照井だ…わかったすぐ行く」

翔太郎と竜は目を合わせて事務所を出て行った

「…。まだへそくりあるかな？」

風都立翼高等学校――

「どついつ状況だ？」

駆け付けた竜と翔太郎は現場の状況を聞いた

「はい！えー犯人はガイアメモリを使用していて身代金1億を要求してます」

マッキーが竜に答えた

「ってなんで探偵がいるんだよ！！」

「ドーパントって言うたらオレだろ……」

翔太郎は左手にスナップした

本部の電話が鳴った

「犯人からです！」

「オレが出よう……」

竜が電話に出た

「観念して出てこい…」

「ふざけんなっ！さっさと1億用意しろっ！！」

「メモリを出して早く出てこい」

「話しても無駄なようだな、今出てってやるよ」

電話が切れた瞬間だった

学校の3階の窓ガラスが割れてドーナツが現れた

「出てきてやったぜ…ハアーーーーッ！…！」

「出てきたのはいいが、変身済みかよ……」

翔太郎はメモリを出そうとした瞬間だった

バンバンッ！！

銃声が鳴り響いた

「なにっ？発砲許可は出してないぞ！！」

「おいっ！照井！ちょ、おいっ！」

おびえた警官たちが我を忘れて銃を発砲していた

「あぁっ！うるせえ！！」

ドーパントが思いっきり腕を薙ぎ払った

「うらぁっ!!」

腕から強い風が放たれて警官たちが吹き飛ばされた

「うわっ!!」

「マッキー!!」

「はっはっは!!」

翔太郎はロストドライバーを腰に装着した
竜もアクセルドライバーを装着した

「街を泣かせる悪党め…お仕置きだぜ…」

『ジョーカー!』

「まさかお前ら…仮面ライダーなのか？」

竜はメモリをかざして言った

「オレに質問するな…」

『アクセル!』

翔太郎はメモリをドライバーに挿した

「変身…!」

翔太郎はジョーカーに変身した

「行くぜっ！」

左手をスナップした

そして竜もメモリをドライバーを挿した

「変．．．身！！」

竜もアクセルに変身しエンジンブレードを振りかざして言った

「さあ、振り切るぜ！！」

Bの目的／襲いかかる残影（後書き）

今日は解説にT2メモリに詳しいあの方に来てもらいました

「あんたちよつといい体してるじゃない」

京水さんです（汗）

「ちよつと勝手にあたしを使わないで頂戴!!」

申し訳ないっすww
つてかオレそんなにいい体してないです…

「あんたの体なんかじえんじえん期待してないわ!!」

うれしいような悲しいような…（笑）
つてか解説してねーしww

「今日はここまでよ、ばいばい」

って勝手に終わらすなよ!!

Bの目的／残影の正体（前書き）

さあ、タイトルの通り正体がわかります

Bの目的／残影の正体

風都立翼高等学校――

「さあ、振り切るぜ！」

校庭の真ん中にはジョーカーとアクセルとドーパントが立っていた

「左！あいつは遠距離型だ、お前は接近で攻撃しろ、オレが遠距離で攻撃する」

「わかった…ってオレに命令すんじゃないっ！！」

「話は終わったか？」

ドーパントがそう言った時ジョーカーの下から風が巻き起こった

「うおっまじかよ！」

「うらぁっ！！！」

ジョーカーは屋上の方へ飛ばされた

「左い…！お前などオレだけで十分だ…ハッ！」

『ジエツト！』

エンジンブレードからエネルギー弾が射出された

「ハアアアアアアア！！！！」

ドーパントは体の周りに台風のような風を纏って攻撃をかわしてア
クセルの方へ突撃した

「なにっ！？ハアッ！！！」

アクセルは突っ込んでくるドーパントにエンジンブレードを振り下ろした
しかしドーパントの纏っている風の風圧によりエンジンブレードが吹き飛ばされてしまった

「クッ……」

「どうしたあ？仮面ライダーさんよお！！」

ドーパントはアクセルを掴みいったん空中に上がりアクセルを地面に叩きつけた

「ぬわっ！」

「はっはっはっはー！！もういっちょ！！！」

ドーパントはもう一度アクセルを掴み地面に叩きつけた

「ぐはぁっ!!クッ…」

「仮面ライダーもたいしたことねえなあ…ん？」

ドーパントは周りを見回して不審に感じた

「警官が誰もいねえ…まさか!」

ドーパントは学校の裏口の方を見た

「くそぉ…余計な真似を…」

アクセルはスッと立ち上がった

「どうやら全員保護したようだな…」

「お前…ワザとやられてたのか…」

アクセルはほこりをはらって言った

「オレに質問するな…」

「この野郎…」

「今だっ！左！！」

屋上にいたジョーカーがアクセルが落としたエンジンブレードを拾ってドーパントに背中を攻撃した

「うおらっ…！」

ガンッ！

「ぐはぁっ！..」

背中を攻撃されたドーパントはアクセルの前に倒れこんだ

「あっ...」

アクセルはドーパントの顔を蹴りあげた

「はぁっ！..よくも散々バカにしてくれたな...」

アクセルはドーパントの体に何十発ものパンチを浴びせた

「グッ...っう...」

「痛そうだな…あリゃそうとうキレてんな…」

ジョーカーはアクセルを見守っていた

「左！何をしている！？」

「あつわりい」

ジョーカーはマキシマムスロットにメモリを挿入した

『ジョーカー！マキシマムドライブ！！』

「照井に怒られちまうからな…行くぜ！」

アクセルはドーパントを蹴りあげた

「うわっ!!」

「左!」

「任せろ!!」

ジョーカーの右手に紫色のエネルギーが溜まった

「ライダーパンチ!!」

アクセルが空中に蹴り上げたドーパント目がけてジョーカーはライダーパンチを浴びせた

「グワアアアアアアアアアアアアアア!!」

空中で爆発が起きドーパントは地面に落ちた

ドーパントに変身していた犯人は変身が解けていた

翔太郎と竜も変身を解いて犯人のもとへ向かった

「まったく騒がしい奴だぜ…」

「これは…」

竜は倒れている犯人の近くに落ちているメモリを拾った

「左、見る」

「T2じゃねえか…」

メモリには『S』と書かれていた

「ストームメモリ…」

その瞬間メモリが砕けた

「なにっ！？T2メモリはブレイクされないはじゃないのか」

「不完全品だからさ」

「！」

翔太郎と竜の後ろにフードを被った男と赤いメッシュの入った男が立っていた

「誰だ貴様…不完全品とはどういうことだ」

「それはオレが作ったT2メモリ…まだ不完全品だったようだな」

竜は銃を出して銃口をフードを被った男に向けた

「財団か…？何者だ？目的はなんだ？」

「オレか…？」

フードを被った男が翔太郎に向かって言った

「久しぶりだな…翔太郎…」

男はフードを外した

「あんた…！？」

「左、知り合いか？」

翔太郎は体中が震えていた

「そんな…嘘だ…ありえねえ…」

竜は翔太郎に肩を掴んだ

「どうした左！」

メッシュの入った男が竜に答えた

「オレ達は財団Xではない」

「じゃあ一体何者なんだ？」

フードの男がポケットに手を突っ込んで答えた

「オレ達は何者かは翔太郎から聞けるだろう……」

竜はおびえている翔太郎をチラッと見てこつ切り出した

「目的はなんだ？」

「目的か……」

メッシュの入った男が腰にガイドライバーを装着してメモリを出した

「ドライバー！？」

フードの男が手を挙げて言った

「この街風都を…破壊することだ！」

『フェニックス！』

赤いメッシュの入った男はメモリをドライバーに挿してフェニックスドーナツになった
フードの男を掴んで空へ消えていった

「何者なんだ…」

鳴海探偵事務所――

「左…あの二人は一体誰なんだ」

事務所に戻ってきた竜と翔太郎は亜樹子と3人で椅子に座り今日の出来事を話していた

「はい、翔太郎君コーヒー」

「おおわりい」

コーヒーを飲んで落ち着いた翔太郎は話し始めた

「フードを被った男の名前は…祐太郎」

「なんだ？」

翔太郎は帽子を顔を隠すくらい深くかぶってはっきりと言った

「左…祐太郎^{ゆうたろう}、オレの兄貴だ…」

「「えっ？」」

「なんでそこまで驚くんだよ」

「だって翔太郎君の家族の話聞いたことないんだもん」

「左…それは本当か？」

翔太郎は帽子を外して言った

「ああ、間違いねえ、ただ…」

亜樹子は聞き返した

「ただ、なに？」

「兄貴は9年前に消息を絶ったんだ…まさか生きていたとは…」

竜は席を立ち窓の方へ行き翔太郎に聞いた

「メッシュの男はわかるか？」

「彼は兄貴の親友のあしだじゅん芦田準だ…」

「芦田準…」

「準さんも9年前に消息を絶ったんだ」

亜樹子は机の上に置いてあるT2メモリを見て言った

「翔太郎君のお兄さんが財団の人だなんて…」

「所長、財団の人間ではないだろう…」

「え？どうして？」

竜は翔太郎の隣に座り言った

「財団は白服を着ている、それに奴らは財団じゃないと言っていた」

翔太郎はコーヒーを入れなおした

「風都を破壊する……」

「オレはこの街を守るぞ、たとえ仲間の家族が敵だとしても……」

「ああ、そのつもりで構わねえ、でもなんで……」

ホテルマンハッタン502号室――

「久しぶりの弟はどうだった？祐太郎」

準が祐太郎に聞いた

「ああ、相変わらずこの街への愛で一杯だった」

ワインを飲んでいた女が祐太郎に言った

「翔ちゃん可愛かったわよね、昔からこの街はオレの庭だって……」

「いいのか、ほんとに弟が敵なんだぞ」

祐太郎はお茶を飲みほして言った

「この街を愛する者は全員オレの敵だ、たとえ弟でもな…」

祐太郎は立ち上がった

「この腐った街、風都を愛する奴は…オレの敵だ、なあ夏菜子…」

Bの目的／残影の正体（後書き）

京水先生のガイアメモリ講座♪

どうも京水さん、今日はちゃんと解説してくださいよ

「わかってるわよぉ」

今日出てきたメモリの解説お願いします！

「ストームメモリ、『嵐』の記憶を持ったメモリよ

体中から強い風を起こすことができるの」

サイクロンとかとは違うんですかね？

「違うんじゃない？」

ってあんたが書いてるんだからあたしが知るわけないじゃない！」

それもそうつすねwww

「ちなみにあたしは嵐では松潤が好みよ」

へえー

「なによ、そういうところ嫌いじゃないわー!」

はいつて言うことで京水先生のガイアメモリ講座は終了です!

「ちょっとその読者さんゝいい体してるじゃない」

はい! 終わり! 次回もお楽しみに! ! !

時を超えるD／貴族探偵？（前書き）

どうも、今回の話を考えるのに時間がかかってしまいました（汗）

一生懸命考えた話をどうぞ！

あんま期待しないでねw

時を越えるD／貴族探偵？

鳴海探偵事務所――

「翔太郎君、依頼だよ！えっと…愛犬のドリーを探してほしいだつて」

いつものように亜樹子は依頼を翔太郎に説明した、が

「私は今忙しい、女、お前が探せ」

「はいい？」

亜樹子はいつにも増して高飛車な翔太郎にイラつき思いっきり頭をスリッパで叩いた

「何様だこらあ、所長様のあたしに指図するなんていい度胸ね！」

スリッパで叩かれた翔太郎は立ち上がった

「なら私が今から所長だ、さあ行け！探してくるのだ！」

「…、だめだこりゃ」

あきらめた亜樹子は一人シヨボシヨボと事務所を出て行った
それを見ていた翔太郎は紅茶を飲みほし、華麗にダンスを踊りだした

「やはり私は美しい」

風都公園内――

「どこや〜どこにおるんや〜ドリーー!!」

両手にスリッパを持った亜樹子は公園の草むらの中で犬を探していた

176

「一人で探すのは難しいよ〜」

「お姉さん!」

亜樹子が振り返った所には女の子が立っていた

「この犬、探してたんでしょ」

女の子の足元には依頼の犬であるドリーがいた

「あっ！ありがとう！助かったわ」

「どういたしまして」

女の子はサッサと消えてしまった

「ありや、まあいつか！依頼達成！金え」

「翔太郎君！依頼達成だよー…ええっー！？」

亜樹子が帰ってきた時翔太郎は踊っていた

「おおそうか、よくやったお供よ」

「誰がお供じゃーっ！？ってなんで踊ってるーっ！？」

翔太郎はステップに踏み答えた

「踊ってるのではない、舞っているのだ」

亜樹子は開いた口が塞がらない状態だった

「どうしちゃったんだろ、いつになく翔太郎君テンションが高い…」

亜樹子は頭を抱えて必死に考えた、そしてスリッパを取り出した

「こうなったら、意地でも!!」

翔太郎を叩こうとしたとき事務所のドアが開いた

「左!」

やってきたのは竜だった、竜と気づいた亜樹子はスリッパをしまい
竜に声をかけた

「竜君!どうしたの?」

「ドーパントの目撃情報が出たんだ…左、一緒に来い」

優雅に舞っていた翔太郎は舞うのをやめ椅子に座った

「誰にものを申しておる、その赤いの」

「赤いのとは…オレのことか」

「そつだ、赤いお供、頭が高いぞ！」

亜樹子は竜の耳元でつぶやいた

「翔太郎君ハードボイルドは無理だから貴族にでもなろうとしてんのかな」

「ハードボイルド探偵ならぬ貴族探偵か…？」

「貴族探偵…それもいいものだな」

」
」

竜の携帯が鳴った

「照井だ…なに？街にドーパント！？分かったすぐ行く」

竜は携帯をしまい翔太郎に言った

「左！ドーパントだ、行くぞ」

竜が事務所を出ようとしたが翔太郎は全く動かなかった

「左！早くしないか！」

「赤いお供、そなた一人で行きなさい」

「いい加減にしないか!!」

怒鳴られても翔太郎は動こうとしなかった

「もういい!」

そう言って竜は事務所を出て行った

「竜君!! ああ… もう!」

亜樹子も竜を追って事務所を出て行った

「全く騒がしい奴らだ」

風都美術館前――

「うおらっ!!!!」

怪物とアクセルが戦っていた

「なんだこいつは!?!」

アクセルはエンジンブレードを怪物に切り付けた

「はっ！」

ふだが怪物は余裕でかわしてカウンターパンチを腹部に浴びせた

「ぬわっ!!！」

そのまま怪物は口からエネルギー弾を無数に乱発射した

「ぐわああ!!！」

「さて、そろそろ過去に…うん？」

「なんだ？この音は？」

アクセルと怪物は同じ方向を見た、そこから汽笛の音が鳴った

「電車？」

空に穴が空きそこから電車が現れた

「もう嗅ぎつけたのかよ！」

電車からバイクが出てきた

「電車からバイク出てきた――！！ほなアホなあ――！！っ――！！！！」

亜樹子は絶叫した

「やっと見つけたよ……」

バイクから降りた青い戦士は怪物にこう言った

「君、僕に釣られてみる？」

時を超えるD／貴族探偵？（後書き）

最後のセリフでわかっちゃったかな？

いやタイトルで分かったのかな

キャラを分けるの大変ですね（汗）

Uに釣られてみる？ノイマジンパラダイス（前書き）

時の列車デンライナー、次の駅は過去か？未来か？

どうぞ

Uに釣られてみる？ノイマジンパライス

風都美術館前――

「君、僕に釣られてみる？」

青い戦士は怪物に向かって言った、怪物はおどおどしながら言い返した

「オレは魚じゃねえ！イマジンだ！！」

「イマジン？」

アクセルは聞きなれない言葉を聞いて頭が『？』になっていた
するとイマジンは青い戦士に向かってエネルギー弾を放出した
それを見ていたアクセルは青い戦士に向かって叫んだ

「危ないっ！」

「はっ！！」

青い戦士はエネルギー弾を長い棒を使って弾き返した

「なにっ！？」

弾き返されたエネルギー弾は直撃し、イマジンはその場で倒れこんだ

「うっ…くそ…電王め…」

「デンオウ？」

イマジンは青い戦士を『電王』と呼んだ

イマジンは起き上がろうとした時、電子音が鳴り響いた

『フルチャージ』

電王と呼ばれる青い戦士は腰に装着されているベルトの前で黒いパスのようなものをセタツチして放り投げた

「行くよ！」

電王は持っていた棒をイマジン目がけて突き刺して動きを封じたそしてイマジンの方向へ走り飛び蹴りを放った

「はああああ！！！！」

「ぐわああああああああ！！！！！！」

キックが命中しイマジンは爆発して砂となった

「すごい…一体何者なんだ…」

アクセルは立ち尽くしていた
すると電王はアクセルを見て電車の中へ入って行った

そして電車はどこかへ消えてしまった

「デンオウ…」

竜は変身を解きバイクに乗った

「所長、事務所へ戻ろう」

亜樹子は何が起きたのか分からない状態でした

「う、うん」

亜樹子は竜の後ろに乗り、二人は事務所へ向かった

鳴海探偵事務所――

事務所に戻ってきた竜と亜樹子はドアを開けた
すると翔太郎が二人に気付いた

「ご苦労であつた、赤いお供にお供1号」

「誰が1号じゃい！」

亜樹子は翔太郎の頭はスリッパで叩こうとしたが華麗によけられた

「ありゃ」

「主人に手をあげようなど…」

翔太郎が亜樹子に指差した

「頭が高っ……」

その時事務所のドアが開いた
ドアの先には女の子と青年が立っていた

「あれ、公園にいた女の子!」

「あ、スリッパの女の人」

「ハナさん…聞いてみようよ……」

男はハナと呼ばれる少女に言った、そしてハナは亜樹子に聞いた

「ここ探偵事務所でしょ、探してほしい人?なのかな、まあとりあ
えず探してほしいの」

「誰を?」

ハナは困った顔をして頭を抱えながら

「誰っていつか……」

その時翔太郎はカップを落とした

ガシャン！

「姫！」

「ひめ？」

亜樹子は驚いて聞き返した、そして割れたコップを拾った

「何してんのよーってあれ？」

翔太郎は膝をついてハナの手を握っていた

「姫、また会えて我はうれしいぞ」

ハナは手を振りほどいて翔太郎の尻を蹴り上げた

「ジーク！何してんのよ！…！」

ドンッ！

その瞬間翔太郎の体から白い鳥のようなイマジンが現れた

「なに！？」

竜はポケットからメモリを出した
それを見た男は竜を止めた

「ち、違うんですこれは…！」

「何が違うんだ！ドーパント、かイマジンではないか…！」

「イマジンですけど…ちょっと違って…！」

「うるせーっ！」

竜は男を突き飛ばした、その時事務所のドアが開き声が聞こえた

「良太郎！」

赤いイマジンと青いイマジンと紫色のイマジンが入ってきた

「こんなにイマジンが…振り切るぜ！」

「てんめえ！よくも良太郎を！！」

赤いイマジンが竜の前に立ちガンを飛ばした
そのイマジンにハナが蹴りを入れた

「モモ！やめてこんなところで！」

「いってーなこのハナクソ女！！」

「まあまあ落ち着いて」

「その声は…まさか！デンオウ？」

竜は電王と同じ声をした青いイマジンに聞いた

「まあね」

「やっとわかったかこの…赤バカ野郎！！」

「モモタロスだって赤バカじゃん」

「ハナタレ小僧！ 誰が赤バカだ！！」

赤いイマジンと紫色のイマジンは事務所の中を走り回った
ハナはそれを止めようと、青いイマジンは二人をなだめようと
良太郎と呼ばれる青年は気絶して、ジークは華麗に舞っていた

「ちょっと暴れないで…」

亜樹子はどつすることもできなかった、その時

「いい加減にしろっ!!!!!!!!!!!!!!」

翔太郎が机を叩いた、みんな止まって翔太郎を見た

「ふんっ！もういいだろジークは見つかったんだし帰ろっぜ」

モモタロスはハナに言った、ハナはジークを見て

「探し物は見つかったので、これで…」

亜樹子はひきつった顔で

「よ、よかったね、早く帰ってね」

モモタロスは良太郎を担ぎドアを開けようとしたとき

「入っちゃえ!!」

紫色のイマジンが翔太郎に憑依した

「イエーイ!!」

翔太郎は急に踊りだした

「左…!？」

それを見た竜は驚いていた、青いイマジンは踊っている翔太郎に言
った

「リュウタロス! 帰るよ!」

「いいじゃん! 楽しーし!!」

そう言ってリュウタロスは踊ったが、急に翔太郎の体から出てきた

「あれ？」

「くっそ…オレの体をもてあそぶな！さっさと出てけ！！」

「嘘だろ…追い出しやがったよ…」

ハナやモモタロス達はイマジンを追い出した翔太郎に驚いていた
青いイマジン翔太郎に向かって言った

「君、特異点なの？」

「うるせっ！！さっさと出てけ！！！！」

モモタロス達は翔太郎に追い出された
最後にハナが亜樹子に向かって言った

「あの…お邪魔しました！」

翔太郎は荒れた事務所を眺めて亜樹子に言った

「なんで気づかなかった…」

「へ？」

翔太郎は床を思いつきり蹴った

「なんでイマジンが憑いてることに気付かなかった！…ああ！？」

竜と亜樹子は目を合わせて言った

「いつもの翔太郎君と変わらなかったから」

翔太郎は膝をついた、そして帽子を被り言った

「何が貴族探偵だよ…」

竜は翔太郎に聞いた

「左、特異点とはなんだ？」

翔太郎は立ち上がり倒れている机を起こして

「さあな」

と答えた、掃除をしながら翔太郎はつぶやいた

「あいつら一体なんだっただ…」

デンライナー――

「良太郎！起きろ良太郎！！」

モモタロスに叩かれて良太郎は目を覚ました
あたりを見回しデンライナーの中にいることに気付いた

「ごめん…ありがとうモモタロス」

モモタロスは照れながら答えた

「いいってことよ」

「モモタロス顔が赤くなってるー！！」

「照れてねえからなつてオレは元々顔は赤いんだよ!!」

モモタロスはバカにして逃げるリュウタロスを追いかけた
それを見てたウラタロスは

「全く、ジークが見つかって一安心だけど…なんか忘れてない？僕
たち…」

「
…」

キンタロスは寝ていた

「キンちゃん…いつまで寝てんの」

リュウタロスを捕まえたモモタロスはデンライナーの客室乗務員の
ナオミにコーヒーを頼んだ

「はい、モモタロちゃん！コーヒードーす」

「おう…あ————っ……………！」

モモタロスは飲んだコーヒを吐き出して叫んだ

「汚い！ちよつとなんなのよ…！」

ハナは顔に吐き出されたコーヒがかかり顔を拭いた

「まだあの時間にイマジンいたんだった」

「ええ————っ……………！」

風都――

「こんにゃろっ!!食らいやがれ!!」

「左!何をしてる!!」

ジョーカーとアクセルは2体のイマジンと戦っていた

そのうちの一体はこの時間でのイマジンを束ねているボスだった

「この時間を壊す!!」

ジョーカーはウルフィマジンを突き飛ばしボスイマジンに向かって
飛び蹴りをした

「何言っただてめえは!!」

だが蹴りをよけられて逆に蹴られジョーカーは地面に叩きつけられた

「ぐはっ!!」

『エンジン!マキシマムドライブ!!』

「はぁっ!!」

アクセルはウルファイマジンをエンジンブレードで斬り倒した

「絶望がお前のゴールだ」

「グワアアアアアアアアアア！」

アクセルはバイクモードになってジョーカーのもとに向かいボスマジンを突き飛ばした

「はあっ！！」

「ぐっ！」

アクセルは倒れていたジョーカーを起こした

「大丈夫か左」

「ああ、まあな」

ボスイマジンは二人を見た

(このままじゃやばいな… 2体1はキツイ… ん？)

ボスイマジンはすぐ近くにいた亜樹子を見た

「これだー!!」

ボスイマジンは亜樹子の方へ走った

「亜樹子!!!! あぶねえ!!!!」

「えっ？」

ボスイマジンは亜樹子の『過去の扉』を開いてその中へ入って行った扉が閉まった後亜樹子は気絶した

「おい！亜樹子！亜樹子！」

変身を解いた竜と翔太郎は亜樹子のもとで声を掛けた

「所長！所長！！」

Uに釣られてみる？ノイマジンパラダイス（後書き）

えっ？まさかの翔太郎は特異点！！

相変わらず文章力ないな（涙）

誰か…アドバイスを…

Kの強さにお前が泣いた！／翔太郎、時を超える（前書き）

オレの強さにお前が泣いた！

Kの強さにお前が泣いた！／翔太郎、時を越える

鳴海探偵事務所――

「亜樹子！おいしっかりしろ！！」

翔太郎と竜は亜樹子を事務所に連れて帰りベッドに寝かせた
亜樹子は気絶したままで目を覚ます気配は無かった

「所長…あのイマジン…一体所長に何をしたんだ…」

「わからねえ…フィリップがいれば何か分かったかもな…」

翔太郎は少し悲しい顔をしながら竜に言った

竜はそんな翔太郎を見て

「左…」

心配そうに声を掛けた、その時事務所のドアが開いた

「あんた達は…」

「ど、どうも…」

事務所にやってきたのは良太郎達だった

ハナは手にカードらしきものを持っていて亜樹子のもとへ歩いてきた

「あの…この人ですよ？イマジンが入って行ったの…」

「ああ、そうだが…なにすんだ？」

ハナは持っていたカードを亜樹子の額にかざした
その瞬間カードに絵柄が浮き上がってきた

「2000年11月25日…」

ハナはそうささやき翔太郎に聞いた

「10年前の11月25日に身に覚えありませんか？」

「さあ、わかんねえな…なんでだ？」

良太郎は翔太郎に説明した

「イマジンはその人の最も強く思う過去に飛んでその時間を破壊するんだ…」

「時間を破壊する…」

ハナはカードを眺めながら翔太郎の前に来た

「あなた特異点みたいだからついてきてくれる？」

「おお、で特異点ってなんだ？」

「特異点って言うのは時間の干渉を受けない人のことで僕とハナさんも特異点なんだ…」

「そう、デンライナーに乗れるのは特異点の人だけだから、それ私たちこの街のことについてよく知らないから、ついてきてくれるわよね？」

翔太郎はドアに掛けてある帽子を手にとって被った

「ああ、この街はオレの庭だ、ついてってやるぜ、どこまででもな」

「やったー！じゃあ早速…」

「待ってくれ」

竜がハナに問いかけた

「オレ一人で所長を守るのは…無理だ…」

翔太郎は

「たしかにな…いつドーパントやイマジンが現れて街で暴れたら照井一人だけじゃな…」

とハナを見た

「オレ達に任せてよ」

ドアの向こうから声が聞こえた

「幸太郎！」

ドアの向こうにいたのは未来の良太郎の孫である『野上幸太郎』とその相棒である
イマジンのテディだった

「この時間のことはオレとテディに任せてくれ」

「ああ、私たちに任せてくれ」

翔太郎は幸太郎の肩に手を置いた
そしてドアノブを回して言った

「ああ、任せるぜ」

そして良太郎とハナと翔太郎はデンライナーに乗って過去へ向かった

2000年11月25日・風都――

「ついたみたいだな、良太郎」

モモタロスがデンライナーから降りて10年前の風都を見回した

「風車多すぎねえか？」

「それがこの街、風都さ」

翔太郎もあとに続いて出てきた

「で、どうるわけ？」

ハナはちよつと偉そうに翔太郎に聞いた
翔太郎は左手をスナップさせて言った

「10年前ならおやっさんのとこが一番だな」

良太郎に憑依していたモモタロスは翔太郎に聞いた

「おやっさん？誰だそいつは？」

「ああ、オレの師匠で…亜樹子の父親さ」

翔太郎たちは鳴海探偵事務所に向かった

Kの強さにお前が泣いた！／翔太郎、時を超える（後書き）

ちよつと短めの話でした

この10年前のこの日は一体亜樹子にとってどんな日だったんでしょかね…

Rは答えを聞いてない／NEW電王×電王×電王？（前書き）

これから始まるけどいいよね？

答えは聞いてない！

Rは答えを聞いてない／NEW電王×電王×電王？

現代・風都――

「左たちは大丈夫なのか…」

「大丈夫さ、じいちゃんがついてる」

翔太郎たちを心配する竜に幸太郎は声を掛けた

その時外で見回りをしてたデイが慌てて事務所に入ってきた

「幸太郎！イマジンたちだ！」

「わかった！行こう！」

竜はうなずき幸太郎と一緒に事務所を出てイマジンの所へ向かった

2000年11月25日・鳴海探偵事務所――

「ここがあの事務所か？」

「ああ、変わってねえな」

モモタロスは事務所の看板を見て言った

「こっちの方がいい感じの看板だな、おい」

「……」

翔太郎は何事も無かったように事務所のドアを開けた

「おやっさん!!」

「誰だ…依頼人か…?」

壮吉は振り返った

「ああ…そうか…まだ会ってねえんだな…」

翔太郎は後ろに少し下がった、それと同時にモモタロスが前に出てきた

「探偵さんよ…ちょっと手伝って欲しいんだわ」

「断る」

「えっはやっ！」

壮吉は椅子に座りコーヒーを飲んだ
そして翔太郎たちに言った

「オレは仕事にメモリを使わないのがポリシーなんだ」

「なんでメモリを使うってわかったの？」

壮吉はモモタロスを指差して

「外でお前がガイアメモリと言っているのが聞こえたからな」

「なるほど」

納得しているモモタロスをどかしてハナが壮吉に言った

「お願い！あなたの力が必要なの！」

「おじょうちゃん…すまないな…」

ハナは肩を落としてドアの方へ向かった

「そんな…」

「仕方ねえさ」

「えっ？」

「男の仕事の8割は決断だ…後はおまけみたいなもんだ…
おやっさんがそう決断したんだ、しかたねえ、オレ達で探そう」

壮吉は翔太郎を見た、壮吉は不思議そうな顔をしていた

（良太郎！僕に任せてよ！）

良太郎の体からウラタロスが現れた

「僕が憑いてみるよ、それ！」

ウラタロスは壮吉に憑こうとした

「邪魔だ」

ウラタロスが憑く瞬間に壮吉は腕を薙ぎ払った
そしてウラタロスは壮吉に憑依することができなかった

「えっ？なんで？？」

「この人も特異点？」

「そうですとも」

ドアが開いてデンライナーのオーナーが入ってきた

「オーナー！？どうして？？」

「どうやらこの時間にイメージンがやってきたようなので駅長と相談した結果

鳴海壮吉さん、あなたに手伝ってもらうことになりました、よろ

しいですね？」

壮吉は帽子を被って言った

「古い友の頼みだ、仕方ないな」

「ではよろしく願いします」

オーナーはお辞儀をしてデンライナーに戻って行った
このやりとりを聞いていたモモタロスは壮吉に聞いた

「あんたら知り合いなのかよ」

「古い友人だ、でオレは一体何をすればいい？」

2000年11月25日・風都レストラン建設地――

「ここにいれば安全だな」

過去に飛んできたボスマジンは建設予定地に身を潜めていた
そのイマジンの手には数十本のメモリがあつた

「ユウタロウだったかな、あいつに言われた通りメモリを盗んだが
…

「どうやるんだっけか？」

ボスイマジンは1本のメモリを見た
そのメモリを起動させた

『イマジン！』

「イマジン…あっ！思い出した！！」

「そこまでだ！」

ボスイマジンは建設予定地の入り口の方を見た

「さあ、観念しな！」

翔太郎とモモタロスと壮吉が入り口に立っていた
翔太郎は指を指してイマジンに言った

「何をするつもりかはわかんねえがもう終わりだ」

ボスイマジンは持っていたメモリをかざして言った

「オレじゃなく、お前らが終わりだ！」

『イマジン！』

「イマジン？なんだそりゃ？」

モモタロスは腕を回しながらボスイマジンの方へ歩いた

「おめえイマジンだろ」

「…うるせえ！！」

「なんでメモリを！？」

「さあな…言われたとおりにするだけだ！」

ボスイマジンはメモリを挿した、外見は一切変わらなかった

「なんの意味があんだ？」

「さあ？」

ボスイマジンは他のメモリを起動させた

『ギガ！』

翔太郎は驚いた表情をしてイマジンに聞いた

「なんだそのメモリは!？」

「これはみゅーじあむだっけか?のガイアメモリ強化用の試作品メモリらしいぜ…」

「ガイアメモリ用強化メモリ…」

ボスイマジンはギガメモリを体に挿した
挿した瞬間、ボスイマジンの体の形状が少し荒々しくなった

「ふうー…!まだだ!!!」

「ギガ!」 「ギガ!」 「ギガ!」 「ギガ!」 「ギガ!」
「ギガ!」 「ギガ!」 「ギガ!」 「ギガ!」 「ギガ!」

『ギガ!』 『ギガ!』 『ギガ!』 『ギガ!』 …

「なに!？」

ボスイマジンは持っていたすべてのギガメモリを体中に挿した
そしてボスイマジンはイマジンの原型がないほど体に変化していた

「はあー…」

「ま、マジかよ…」

「こんなことが…」

壮吉も驚いていた

「はっ ははははは……お前らが終わりだな……！」

「こっとなつたら止むを得ん……」

壮吉はロストドライバーを装着した
そしてメモリを取り出した

『スカル！』

「変身」

『スカル……！』

壮吉の体の周りに風が巻き起こり壮吉は仮面ライダー スカルに変身した

「よっしゃ！良太郎！オレ達も…ってあれ？」

モモタロスは良太郎の体の外にいた

「おい、良太郎！」

「変身」

良太郎は電王のライナーフォームに変身した

「モモタロス！僕、頑張ってみるよ」

「マジかよ…これからクライマックスなのによ…ん？」

気が落ちたモモタロスの視線の先には翔太郎がいた

「いいこと考えたぞ、これだ！！！」

「うお！おい！！」

モモタロスは翔太郎の体に憑依した

「これで問題ナシ！ふん！」

ボスイマジン^{ボスイマジン}は剣を出してモモタロスに話しかけた

「何するつもりだ？」

モモタロスはベルトを取り出して腰に装着した

（おっおい！てめえ何するつもりだ！）

「うるせえ！ハートホールドは黙ってる！」

パスを出してベルトの赤いボタンを押した

「変身！」

パスをベルトにセタッチし翔太郎に憑依したモモタロスは電王に変身した

『ソードフォーム！』

そしてあの決めポーズと決め台詞を言った

「オレ、参上!!」

Rは答えを聞いてない／NEW電王×電王×電王？（後書き）

読者の君？僕に釣られてみる？

次回電王編ラストです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1311y/>

仮面ライダーwReturns 仮面ライダージョーカー

2011年11月26日22時58分発行